

武蔵野台地の東端には、二つの台地が半島のように突き出していて、それぞれの崖線に、かつては豊富な湧き水が流れていた。一帯には、旧石器時代の遺跡、その後の「縄文海進」のころの貝塚が並んで発掘された。

居住に適した土地であったので、それ以後も多くの人々が住み、以後の時代にもそのしるしを残し、遺跡の多くは複合型である。

上野台地

日暮里駅付近を北端、京成上野駅を南端、都立上野高校を西端、鶯谷駅南口を東端とする、南北約2キロ、東西約1キロの菱形をなしていて、東側は弓状の急な崖となり、これに沿って現在ではJR京浜線、山の手線が走る。



上野台地の最近の調査によれば、関東ローム層の中に旧石器時代の遺跡が見つかり、上野桜木遺跡では谷の両側に広がっている様子が明らかにになった。

時代は下って縄文前期には、奥東京湾が入り込み、台地の縁辺には、南から新坂、領玄寺、天王寺、延命院貝塚、道灌山遺跡を経て、その北には、西ヶ原、中里貝塚が続く。

上野桜木町遺跡

この遺跡は、日本医科大学看護師養成施設跡地で、ここにマンションを建設するにさいして発見された。

明治三十二年、わが国ではじめての薬剤師を養成する薬学専門学校として東京薬学専門学校がこの地につくられ、後に女子の専門学校となり、さらに東京薬科大学女子部として数十年にわたって使われていた。移転のため建物は日本医大に譲渡された。

この地域は、上野台地の西側に位置し、東京芸術大学、上野公園も近く、南には広大な上野忍岡遺跡群が広がっているが、関東ローム層の中に遺跡が発見されたのは、上野桜木町ではじめてのことであった。

この遺跡からは、古代の貝塚が発見され、下って江戸時代の寛永寺子院（養寿院、松林院）が発掘された。江

上野桜木町遺跡の発掘現場



戸時代後半ころの礎石跡、瓦廃棄の土坑、墓抗や子院以前の地下室や井戸の跡が見つかり、安政二年（1855）のころとされている地震の跡も確認された。さらに埋没した谷の中に古代の溝とそこに廃棄された多量の貝殻、また谷の両縁では、縄文・旧石器時代の遺跡が発見された。遺物では、中国製品を含む江戸時代の大量の陶磁器、古代・中世の陶器や縄文土器、黒曜石のナイフなどの旧石器が出土した。

発掘は建築のための制限があつて、二ヶ月半の短期であつたが、多くの出土品が発見された。
根津谷

上野台地と本郷台地との間の低地は根津谷と呼ばれ、一万年前に古石神井川が形成したものである。その後藍染川となり、この川のあとは現在文京区と台東区との境界になっている。

本郷台地

この台地の南端を占める東京大学構内では、旧石器時代の遺跡が発掘されているが、縄文前期には、内湾が入り込んだため、お茶の水、湯島貝塚、東大構内遺跡、弥生町、道坂遺跡が続く。

参考資料…

「台東区の遺跡」(平成17年3月、台東区教育委員会)

東京都指定史跡動坂遺跡

所在：文京区本駒込三丁目三六

縄文中期(約4500年前)の集落跡と享保三年(1718)に置かれた鷹匠御役屋敷跡の複合遺跡。この地点で貝塚が発見されたので、東京都は二帯の試掘調査を行ない、縄文中期の住居跡二十余軒が見付かり、住居跡内部には貝塚も在った。また当時使われた土器や石器も多量出土した。

縄文時代には、動坂下の根津谷は東京湾の入江につながつていて、見付かったヤマトシジミはここで取れたもの、その他の貝、マガキ・ハマグリ・サルボウや魚のクロダイ、スズキ・アジ・イワシ・コイ、獣のシカ・イノシシ・キツネなどが発見され、当時の生活が窺われる。

鷹匠御役屋敷跡は明治維新で東京府に移管され、明治時代に駒込病院が設置された。



都立駒込病院前の動坂遺跡モニュメント



言問通りを往く

上野桜木

東京大学農学部と東大の本郷キャンパスとの間を坂上として、本郷通りから入つて言問通りを不忍通りへ下る坂を「弥生坂」という。幕末には、この坂下に幕府の射撃場があったので鉄砲坂ともいう。

旧町名の「向ヶ丘弥生町」は、この台地が上野台地から見えて、向ヶ丘であり、またかつての水戸藩主が、この地の三月、弥生の風景を愛でたことに由来するという。

現在の東京大学弥生キャンパスは、徳川時代には水戸藩の屋敷だった。明治二年国の所有となり、旧制第二高等学校がつくられたが、昭和十年、駒場にあった東大農学部の敷地と交換された。因みに駒場に移った旧第一高等学校は、戦後の学制改革によって東大教養学部となった。

坂の右側の小路を入ると、弥生美術館、竹下夢二美術館、立原道造記念館などがあり、



本郷通りと言問通りの交差点、左は東大農学部、右は東大本郷キャンパス

弥生式土器発掘の碑が立っている。

坂の下は「根津」。縄文海進のころ、二つの台地の間に入り込んだ海の浅瀬であった。賑やかな交差点を越え、今度は上野台地を上って往く。

商店街に続く谷中に入ると、左側には多くの寺が見えてくる。数百年を経た樹木も聳えていて、歴史を偲ばせる地域だ。

「乗寺」を左に見て、「谷中六丁目」交差点を越え、上野桜木に入ると、古い家並みが続き、文化と人情の香りはいまでも香しい。町名のいわれは、櫻の木が多かったことに由来する。魅力溢れるお店が百年

まず「喜久月」は、すでに建物が百年近くを経た和菓子店で、白味噌あんを求肥で包んだ「あをうめ」は絶品とされ、店構えは小さいが、客足は絶えない。

何軒か先の東京芸大に続く「芸大通り」との交差点に位置する「カヤバ」は木造の喫茶店、その手前、いま桜木マンション

が立っている場所には、もともと古い薬学専門学校「東京薬専」(のちに東京女子薬専、東京薬科大学女子部)があった。裏手には東京芸術大学のキャンパスがあつて、カヤバのお客の多くは学生たちで、談笑は絶えない。芸術を志す学生が、楽器を大切に抱えながらこの交差点を行き交う。

向側には、ここに移築された「旧吉田屋酒店」(下町風俗資料館付設)があり、左折すると直ぐ、いまだに主人自ら店内で手焼きをしている、伝統の「嵯峨の家」が盛業中。

次第に谷中の墓地に近付き、右側には寛永寺境内が開けてくる。

寛永二年(1625)徳川三代將軍家光は、江戸城の良(うしろ)の鬼門鎮護するため、川越喜多院の天海僧正に命じて建てさせた寛永寺は、徳川家の墓所として、六人の將軍の靈廟がある。一帯は寛永寺の寺領で、明治維新の後、同寺が所有するこの地には、多くの作家、芸人、

文化人が移り住んだ。昭和初期、川端康成が「弥生」の二高生であつたころ、谷中の静寂を憧れ、六年間、文壇に登場するまでここで暮らした。康成は来客をもてなすために「喜久月」の菓子を買いに、奥様を走らせたことが書き残されている。

寛永寺から崖を下り、下の低地に行く道が必要になつてきたので、「寛永寺坂」に道路が新設され、大正十一年ころには、鉄道線路を踏切で越えていた。跨線橋が架設され、山の手と下町を貫く重要な道路になつたのは、昭和三年のことであつた。

鶯谷駅付近で湾曲して入谷を抜け、浅草寺の裏を通つて、言問通りは隅田川を越える。言問橋の名は、都落ちした在原業平が隅田川を渡る時読んだ歌に由来する。船頭に都鳥という鳥の名を聞いて望郷の念にかられ、

「名にしおはば いざ言問はん都鳥 我が思う人は ありやなしやと」と詠んだ。



上野桜木二丁目、谷中霊園へ



せんべいの嵯峨の家



根津交差点・善光寺坂を望む



上野桜木交差点・喫茶店 カヤバ



喜久月・和菓子の老舗

喜久月の「あをうめ」



谷中六丁目、一乗寺



根津交差点から弥生坂を振り返る

